

海外アカデミック・ディスカッション	
JFL環境における上級日本語会話指導	
小松 奈々	
比較社会文化学専攻	
期間	2010 年 10 月 30 日～2010 年 12 月 10 日
場所	韓国 ソウル市
施設	同徳女子大学校

内容報告

1. 活動目的

近年、インターネットの普及や留学準備環境の整備により、日本国外での日本語学習者数は増加の一途をたどっている。特に、韓国では全世界の日本語学習者の 3 割を占める 91 万人が学んでいる¹。JFL 環境では、同一言語を用いる学習者同士の関わりやネイティブおよび非ネイティブ教師の担う役割など、国内とは異なる教育内容が発展していると推察される。学習者の日本語能力がどのような学習環境を経て身につけられたのかを知るためには、国内のみならず海外の教育事情も詳細に調査する必要がある。

そこで本活動では、韓国の大学における日本語授業でどのような学びが達成されているかを調査した。

2. 本活動の博士論文における位置づけ

現在まで、熟達した日本語学習者、いわゆる超上級レベルの日本語学習者に備わる会話運用能力については、複段落を用いて詳細に語る、考えの根拠を示し論理的に話すなどの特徴が明らかにされている（荻原ほか 2001、鈴木 2006）。しかしながら、一般的な発話場面は会話相手との相互行為によって成り立っていると捉えると、相手への反応、相手との会話内容の共同構築など、さらに幅広い視点から見た特徴が明らかにされるべきであろう。筆者の博士論文のテーマは、意見交換場面において超上級学習者と母語話者はどのようなやりとりの過程を経て話し合いを深化させているかを解明することである。

現在までに収集したデータによると、熟達した学習者の中には基礎を自国で学び、上級に達してから日本で進学、就職するというケースが多い。そこで本活動では、学習者の母国における学習段階を観察し、どのように会話能力を身につけているのかを調査することで今後の対象者の精緻化に役立てたいと考えた。本活動は、博士論文における基礎調査に当たる。

JFL 環境における韓国人学習者を対象とした研究は、学習スタイルや学習ストラテジーを調査したもの（朴 2007、朴 2010）や、日本語学科全体の流れを示したもの（李 2004、金 2008）など数多くあるが、実践現場でどのような活動が行われているかを質的に観察したものは少ない。本活動では、JFL 環境において数少ない機会であると思われる日本人教師との関わりを通して、学習者が何を学びとっているかを観察した。

3. 活動内容

3.1 授業見学

4 年生が対象となる「発表・討論」および「文化間コミュニケーション」の 2 授業を 1 カ月間に渡り観察した。

「発表・討論」では、学期の前半に発表時によく使われる表現を教科書で確認する。学期の後半は、2 人ずつペアになって各組の関心のあるテーマでプレゼンテーションを準備する。その後、発表された内容について賛成、反対、討論の司会、傍聴者に役割を分け、討論を行う。討論の様子はビデオに録画し、後日全員でフィードバックを行う。

この授業では、発表に関する質問、討論を進める準備など、授業における手続きが全て日本語で行われており、教師とのやりとりを通して自然な表現を身につけようとする様子が観察された。

「文化間コミュニケーション」では、日本人向けに書かれた理論書の講読を中心に授業が進められる。各章の担当になった学生が事前に教科書の内容を韓国語に翻訳し、当日全員で照らし合わせながら読み進む。

この授業では日本対韓国という構図ではなく、西洋と東洋の比較を通して間接的に日本と韓国の文化差について学生が気づいていくという過程が見られた。教師は日本人としての自然な感覚や常識を紹介し、それについて西洋、また韓国ではどうなのか常に問いかけていた。それにより、学生は客観的な目

で日本を観察する視点を得ていることが伺えた。

3.2 アンケート

見学後にアンケートを行い、学習者の進路および授業に対する期待について調査した。

卒業後の進路予定として、39人中17人(44%)が日本で進学または就職することを希望しており、学んだことを日本で生かしたいと感じている学生が多いことがわかった。

また、日本人教師と韓国人教師に求めるものが異なると答えた学生が多く、31人(79%)が異なる授業方式、34人(87%)が異なる授業内容を求めている。具体的には、日本人教師にはグループ、発表形式の授業形式で、会話や実用的な文法の授業を希望するという記述が多く見られた。

4. 今後の予定

本調査内容は、2011年2月に行われる韓国日本学会第82回国際学術大会において発表する予定である。今後韓国の大学において有益な授業とは何か、意見交換を活発に行っていきたい。

注

1. 『海外の日本語教育の現状 日本語教育機関調査・2006年(概要)』国際交流基金編

参考文献

- 李徳奉 (2004) 「韓国の新学習指導要領に見る日本語教育の新しい動き」『世界の日本語教育: 日本語教育事情報告編』7, 11-27
- 荻原稚佳子・斎藤眞理子・増田眞佐子・米田由喜代・伊藤とく美 (2001) 「上・超級日本語学習者における発話分析—発話内容領域との関わりから—」『世界の日本語教育』11, 83-102
- 金英美 (2008) 「韓国の大学における日本語教育学科のカリキュラムの変遷について—専攻科目の分析を中心に」『アジア教育史研究』17, 40-57
- 鈴木志のぶ (2006) 「日本語学習者によるアーギュメントの特徴 —上級者・超級者間の差異—」『Speech Communication Education』19, 95-112.
- 朴志仙 (2008) 「韓国人日本語学習者における学習スタイルの研究動向: Kolbの学習理論を中心に」『人間文化創成科学論叢』10, 47-54
- 朴一美 (2010) 「学習ストラテジーと韓国人日本語学習者要因との関係」『人文社会科学論叢』19, 75-90